

武士と和歌

はじめに

武士は自らを天皇や貴族に従属していた状況から脱却せしめ、さらに日本の歴史上に約七百年ものあいだ政権を築いてきた。その長きにわたる武家政権の礎となったのは、大概鎌倉幕府と考えられるが、その政治性は封建制度を通じて武士階級を確立、存続、誇示することにあつた。本稿は武士の発生から論を發し、鎌倉期の東国武士の京都憧憬について論及し、源頼朝、実朝父子の和歌を考察していきたい。

一

一般的に武士とは武芸を習い、軍事行為に携わる者をいう。ただ、武士の発生については多く議論はなされており、土地を支配する

村 重 衣 舞

領主制理論の武士や武芸を行う職能性武士など武士の発生を一定の概念に当てはめることは難しく、歴史学においてもまだまだ課題は残されているといえる。ここでは鎌倉幕府の成立に伴い領主制理論を取り上げる。

領主制理論にみる武士は私営田の開発領主などの地方豪族が反発する農民や受領に対抗するため武装したことを起源としている。私営田・所領は武士の生活源であり、所領に彼らの血族や家来を住ませたり、所領へ派遣させたりしていた。結果、武装した組織が族として強まると、戦闘を行う際に組織の長が指揮官となつて命令する権力を得るようになった。この点、藤直幹氏は地方武士団の中核は豪族であり、その武力勢力が公家社会の中に組み入れられ、社会的地位を向上させたとして^①いる。また、石井進氏も藤氏と同様の考えを示した上で、有力な序化した一部の豪族が

つて国司が「国ノ兵共」を組織した方法を受け継ぎ、かつ、「在庁官人」をも支配しようとして国司や目代との対立を深めていったのだと述べ、さらに源平合戦はそうした豪族と国司の対立関係の爆発であり、有力武士団は源頼朝を鎌倉殿に推し立て、その下に結集することにより鎌倉幕府を成立させたのだと指摘している。

次第に軍事力を増した地方豪族は国家の兵を上回る兵力と財力を築き上げた。地方豪族の兵力については『今昔物語集』巻二十五「源頼信朝臣平忠恒を責めたる語」の国ノ兵以外の国司直属の軍である館ノ者という武力を持った男たちの存在からも確認できる。また、『宇治拾遺物語』「伯の母の事」からは常陸国の豪族、多気大夫と娘たちの豪勢な暮らしぶりに地方豪族の財力の豊かさを知ることができる。さらに、『今昔物語集』や『古今著聞集』、『宇治拾遺物語』には源義家ら地方武士が地方領主として勢力を振るっていたことが記されており、武力を持った男たちが領地を掌握することによって国家を凌ぐ兵力と財力を手にしていたことがうかがえる。

しかし、地方豪族たちは東国国家の長として、京都と対応するための貴種性は持ち合わせてはいなかった。頼朝が鎌倉將軍になり得た理由を石井進氏は『吾妻鏡』で老将三浦介義明が「源氏代々の家人である自分が、いまその『貴種』再興の時にめぐり合える

のは幸せだ」と述べたことを挙げ、さらに頼朝の再起の奇跡には頼朝が皇室の血筋を引く「貴種」であったことが関東武士の保護者、武家の棟梁としての資格が認められたのではないかと指摘している^③。つまり、地方豪族を動かし、さらに東国国家の長として今日と中央政権の天皇と対峙するためには頼朝が貴族出身の嫡流で貴種性（皇親）を持ち、加えて、伝統的權威を備えた人物であることが重要であったといえるのだ。

さて、治承・寿永の内乱は、一一八〇（治承四）年四月九日に以仁王と源頼政が平氏打倒の決起を呼びかける檄文を諸国の武士に伝えたことから端を発した。つまり、この呼びかけに応じ、諸国の武將が立ち上がったとされている。同年五月に以仁王と頼政が敗死し、その三ヵ月後に頼朝は挙兵するが、石橋山の戦いで平家方の大庭景親と戦い大敗する。なお、頼朝が戦場に赴いたのは石橋山の戦いと富士川の戦いのみであり、戦闘行為は異母弟の範頼、義経、従弟の源義仲らに委任し、自身は鎌倉に留まり指示を与えていた。これは、東国国家形成を推し進めるためと思われる。事実、頼朝は同年十一月十七日には御家人の統制や軍事、裁判を扱う侍所を設置した。侍所の長官は別当と呼ばれ、別当には御家人の和田義盛、所司には梶原景時が任命された。この侍所の設置により頼朝は自らに従属する御家人たちの統制を組織化し、支配

者としての地位を確立したのである。

一一八三(寿永二)年十月二十三日には東海道、東山道の支配権を朝廷から承認された。かくして、頼朝の東国支配が合法的なものとなった。さらに、翌年十月六日には一般政務の処理など文書保管など文書に関する事務を行う公文所を設置し、京都出身の大江広元を別当に中原親能と藤原行政らを寄人に任命した。また十月二十日には訴訟当事者の審問と記録を行い、訴訟受理と金銭貸借など民事裁判を管轄する問注所を設置し、初代執事(長官)には三善康信を任命した。このように、頼朝が京都の政局に通じた人物を幕府の要職就任させることによって、東国に京都中央政権から独立した政治の場を創始しようと計画していたことは明らかである。

そして、一一八五(文治元)年には後白河院から頼朝追討の命令を受けた義経の追捕を目的として守護・地頭の設置を朝廷から勅許された。地方の守護は各有力御家人を派遣して地頭の監督と謀反人や殺人などの重罪犯を逮捕処罰する軍事指揮官としての役目があり、地頭は年貢の徴収や納入、土地の管理および治安維持などの役目があった。⁽⁴⁾地頭は平氏も一部行っていたが、給与が一定ではなく、土地ごとの慣例に従っていたので、逆に頼朝はその職務を明確化することによって、任免権を国司や荘園領主から幕

府の手中に収めることに成功し、かつ、全国的支配の確立にも一歩を踏み出すことができた。さらに、一一八五年には、かつて平氏が管掌していた内裏や院御所の警護を行う京都市大番役を鎌倉幕府も引き受け、一一九二年頃からは御家人の所役として、非御家人の勤仕を排除した。こうすることで、頼朝はいつでも中央政権の動向を鎌倉に入手することが可能となったのである。

一一八九(文治五)年に義経を匿った藤原氏を滅ぼし奥州に勢力を拡大。頼朝の鎌倉幕府の創設、および源氏再生計画は確実に実行に移され、一一九〇(建久元)年には、ついに上洛し、朝廷から謀反人の討伐や殺害人の追捕などの諸国守護権を委任されると、御家人たちを次々と守護地頭に任命した。また、一一九二(建久三)年三月に後白河法皇が崩御し、その七月には頼朝は朝廷から念願であった征夷大將軍に任命された。一般的に鎌倉幕府は頼朝の征夷大將軍の就任により、正式に開かれたとしている。こうして、頼朝は一一八〇(治承四)年の挙兵から、僅か十年で中央政権と対応する東国国家を誕生させ、武家政権の基盤を築いた。

二

武家政権を東国鎌倉に樹立したものの、源頼朝は京都の情勢には絶えず強い関心を抱いていた。それは頼朝が伊豆配流中に三善

康信を手配して京都中央政権の動静を報告させたことから明らかに、鎌倉幕府が武家政権の特質を持たせながら京都中央政権を意識した機関を設置し、幕府の枢要な経営を朝廷の内情に通じる大江広元などに担任させていることから顕著である。このような頼朝の京都憧憬について、龍爾氏は父義朝が平治の乱にて敗死し、頼朝自身も伊豆に配流され不毛な生活を送ったことが、当時の政治の中心であった中央政権の政治情勢について関心を持つ切っ掛けになったと述べ、頼朝は中央政権の復帰を狙っていたので京都の要素を含むものを見逃せなかったのだと指摘している。⁵⁵⁾

また、頼朝の京都への関心は政治的側面もさることながら、文化的側面への摂取と多岐にわたった。頼朝が京都文化に興味を抱いていたことは『吾妻鏡』からもうかがえ、義経の行方を尋問するため捕縛された静御前が京都において母磯禪師とともに著名な白拍子として知られていたためか、頼朝は静を鎌倉に招いて、歌舞を見物している。また、建久五年に頼朝は上洛の前に住吉社頭での流鏑馬を想定し、弓馬の術に堪能な武士を集めて流鏑馬の作法を調査するなど、東夷と蔑まされることがないよう、東国の覇者としての威厳を誇示するため知識と作法を身につけた。さらに、翌年の上洛の折には、歓迎のため集合していた延暦寺の僧侶にどう答札をすべきか困惑した頼朝が京都の事情に通じた橋公業に命

じ、公業は僧侶たちに、武士の作法に下馬する習慣がないので馬のまま通行することを許してほしいと感謝の言葉を述べ、頼朝は僧侶の列に馬を進め、馬上にあつて弓を取り直して会釈としたという。この点、京都の人々に東国武士の作法を見せ付ける効果があつたと考えられ、頼朝には鎌倉を政治的にも文学的に優れた土地にすべく京都文化を積極的に取り入れ、京都に負けることも劣らない独自の鎌倉文化を築き上げるという摂取醇化の思想があつたといえるだろう。

では、このような頼朝の京都文化の摂取に対し、頼朝と実朝は京都文化をどのように捉えていたのか。『吾妻鏡』によれば、頼朝と実朝の京都憧憬には政治的な側面よりも文化的（娯楽）における側面が強かったことが窺える。殊に頼朝は蹴鞠の鍛錬のため京都の仙洞御所に奏請し、この道の名匠紀行景を鎌倉に招くなど積極的に蹴鞠を摂取した。このため、周囲から蹴鞠のため政務を擲つたと非難されるほどであつたという。そして、実朝に至つては娯楽にとどまらず、私生活、価値観にも京都的であることを重視し、かつ、京都（都）という土地そのものへ憧憬の念を抱いていたといえる。こうした土地讚美の側面は、実朝の『金槐和歌集』に顕著であり、生涯一度も足を踏み入れたことがない大和、吉野など都の土地を歌に詠み込んでいることから指摘できる。さら

に、実朝は結婚においても京風を重要視し、北条政子が用意した東国の足利義兼の女との縁談を断り、京都の坊前大納言信清の女との婚儀を整えている。この信清の女は後鳥羽院といとこ同士で、彼女の姉妹は後鳥羽院と婚姻しているため実朝は後鳥羽院と姻戚関係結んだことになる。実朝が後鳥羽院と姻戚になることを意図していたか否かは不明だが、京都文化に対する憧憬の念は私生活においても顕著な事実は否定できない。

実のところ、鎌倉期は頼朝らに限らず、鎌倉武士も京都文化に強い関心を示していた。実朝の側近だった宇都宮頼綱（蓮生）と朝葉兄弟は関東で最も文化的な武士団と言われた宇都宮氏の出身で、宇都宮歌壇と呼ばれる地方歌壇も形成しており、武士と和歌の結びつきの一つの接点ともなっている。実朝の死後、初の皇族将軍として宗尊親王が鎌倉に入ってから武士の和歌愛好はより頻繁となり、東国に鎌倉歌壇と呼ばれる文芸活動は最高潮に達し、『万葉集』、『源氏物語』等の古典享受なども行われた。

鎌倉期の武士の動向について池上英子氏は、

鎌倉のサムライは一方で貴族的な高度な文化を強く讃仰し、朝廷儀式や詩の嗜みとしての「和歌」など貴族に特徴的な礼儀作法を学ぶこと、しばしばに及んだ。

サムライは自分たちが持っていないような芸術的洗練を持つ

朝廷文化に強く魅かれていた。しかし他方で、サムライのなかでも政治的に俊敏な連中は、この洗練された朝廷ライフスタイルで競い合うことの危険な側面を十分に承知していた。こうしてサムライたちは、朝廷文化の高度な芸術文化を嗜みながらも、武人的価値のなかに自らの誇りを築き上げようとしたのである。

としており、鎌倉の武士たちが文芸など文化的なものにおいて、京都文化を摂取醇化しながら武士階級に独自性を見出していることを指摘している。⁽⁷⁾ こうして鎌倉武士の京都賞賛の傾向は戦国期に引き継がれ、戦国武將は和歌に加え、茶道、華道、特に王朝文学を習得する者まで現れ、能登の戦国大名畠山義総に至っては『伊勢物語』の研究を進め、その解釈は公家にまで注目された。

さて、これまでは鎌倉武士が京都を学問、文化が最も発達した土地という憧憬の眼差しを向けていたことを見てきた。だが、反面、京都の人々は東国、および地方を文化的に発達しておらず、無教養であると軽蔑していたようである。たとえば、『源氏物語』玉鬘巻に玉鬘に求婚する大夫の監という肥後の武將が登場し、無骨な振る舞いで玉鬘とその乳母を恐ろしがらせている。ここで大夫の監は、自分は田舎者ではあるが和歌ぐらい詠めると述べて、たとえ京都出身者でなくても教養がないというわけではないと主張し

ている。また、『平家物語』剣巻には前九年の役で安倍貞任の弟宗任が捕らわれて京都に連行された際、京都の人が宗任に梅の花を差し出して「これは何か」とからかった。すると宗任は、

我が国の梅の花とは見たれどもおほみや人は何と云ふらん

（平家物語・巻十一・九七四）

と即座に和歌を朗詠して京都の人を驚かせた。さらに、『古今著聞集』一八五段「田舎上りの兵士の水上月の秀歌と大官先生義定が尾上松の秀歌の事」には、伏見の修理大夫俊綱の邸宅にて、人々が「水上のつき」という議題で詠歌していた折、田舎より上つた兵士が中門の付近でこれを聞いて青侍を呼び、「今夜の題を歌に詠んでみました」と、

水や空そらや水とも見えわかずかよひてすめる秋の夜の月

（古今著聞集・一四三）

歌を伝えた。青侍がこの歌を披露すると人々が感動し、この夜これほどの歌は出てこなかったという。

察するに、これらの物語は地方の人々が京都の人々と対応できる知識を持っており、決して無教養ではないことを示唆している。では、京都文化に対応する知識が如何にして地方に行き渡り、彼らはどう知識を得たのか。考えられる理由として、一つに頼朝たちと同様に地方の権力者が京都から知識人を招待し、その文化を

摂取したことがあげられ、また二つに戦乱により貴族や僧侶が地方へ疎開し、さらに貴族たちの没落、地方下向によって、彼らを持っている知識や文化が地方の人々や武士へ切り売りされていたことが考えられる。

だが、逆に、京都の人々が地方文化を憧憬する場合もあった。『万葉集』で石川少郎や大伴家持が方言を用い詠歌しているが、このことについて古橋信孝氏は都人が都言葉とその土地の言葉との違いに驚いたため、歌は方言を詠み込むために作られたのだと指摘している^⑤。つまり、石川少郎や家持は地方の言葉が都言葉と異なることに驚きながらも、それを詩歌的な芸術へと取り込むことによって、都とかけ離れた、異国的な雰囲気味わおうとしたといえるのである。地方の異国性を表現するのは和歌だけに留まらなかった。たとえば、京都中央政権に属していた源融は、宮城県の塩釜に惹きつけられ、邸宅の河原院庭園に塩釜を表現した。造園にある池は海水を流し、塩釜の塩焼きの様子をも再現していた本格的なものだったと伝わる。このような東国憧憬について折口信夫氏は、東国のもとは異国趣味に附帯して特別に歌人等の歓迎を受けたと指摘している^⑥。思うに、これらの東国文化は京都の人々へカルチャーショックを与えると同時に、和歌や造園など詩的、視覚的に取り込まれることによって、文学性、芸術性を帯び

た東国世界への視野の拡大となったことは否定できない。

三

源頼朝という政治家としての側面を連想しがちであるが、勅撰歌人としての顔も持っていた。『吾妻鏡』文治二年八月十五日条には、

十五日己丑。二品御参詣鶴岡宮。而老僧一人徘徊鳥居辺。怪之。以景季令問名字給。之処佐藤兵衛尉義清法師也。今号西行云々。仍奉幣以後。心靜遂謁見。可談和歌事之由被仰遣。西行令申承之由。廻宮寺奉法施。二品為召彼人。早速還御。則招引宮中。及御芳談此間。就歌道并弓馬由。条条有被尋仰事。西行申云。弓馬事者。在俗之当初。愁雖伝家風。保延三年八月遁世之時。秀郷朝臣以來九代嫡家相承兵法焼失。依為罪業因。其事會以不殘留心底。皆忘却了。詠歌者。対花月動感之折節。僅作卅一字許也。全不知與旨。然者。是彼無所欲報申云々。然而恩問不等閑之間。於弓馬事者。具以申之。即令俊兼記置其詞給。緯被專終夜云々。

とあり、頼朝は西行に弓馬の道だけでなく、作歌についての質問をし、藤原俊兼に西行の言葉を書き取らせている。頼朝が武士の生き方、優れた和歌を詠むなど、西行から何らかのヒントを撰

取して、自己価値を高めようとする心情が読み取れる。

さて、頼朝の歌は贈答歌や説話集に見出すことができる。『増鏡』には建久初めに頼朝と梶原景時が上京し遠江国橋本の宿についた時のことが書かれている。宿泊した橋本の宿に遊女たちが着飾って参上してきたので、頼朝が景時に向かつて、

橋本の君になにか渡すべき (増鏡・第二十二)

と聞いた。すると、景時が

ただそまやまのくれであらばや

と答えたので、頼朝は愛想がないと思ひ、遊女に馬の鞍や紺色の絞り染めを運び出して引き出物としたので、遊女は大変喜んだとされている。ここで登場する梶原景時は歌道の家である後徳大寺家の左大臣実定に仕えていたこともあり、和歌にまつわる説話に息子の景季と登場し、頼朝と和歌説話に花を添えている。

また、『古今著聞集』第二二三「右大臣頼朝、北条時政と連歌の事」には、頼朝と北条時政の連歌が収められ、頼朝が時政と一緒に守山で狩りをしている際に詠まれた連歌が載せられている。

守山のいちごさかしくなりにけり 時政

(古今著聞集・巻五・二〇二)

むばらがいかに嬉しかるらむ 頼朝

時政が詠んだ「もる山」とは守山のことであるが、「守る」には

養育するという意味が込められ、「いちご」は苺と市児、「さかしく」には盛しくと賢しくがかけられている。そして、頼朝の歌の「むばら」は茨と乳母等が掛詞とされている。「古今著聞集」と同様の説話が『菟玖波集』にも収められているが、こちらの説明に「前右大臣頼朝上洛之時、守山を過ぎける時、苺盛りなるを見て、連歌せよといければ」とあり、苺を見て、二人が掛詞を用いて、子どもの養育について連歌を詠んだことがわかる。

こうした頼朝の和歌説話は、彼が文化人であったことを示す資料といえる。しかし、これらは説話を残した諸所の作者が、文武両道であった源義家の武勇伝を強く意識し、武家政権を確立させた頼朝に義家的な文武両道の武士像を投影させたフィクション性の高い作品であるとも考えられるだろう。

さて、頼朝が勅撰歌人であることは先に述べたが、彼の死後、『新古今和歌集』に歌が二首採られた。そのうちの一首、

道すがら富士の煙もわかざりき晴るるまもなき空のけしきに
(新古今・旅・九七五)

雲のせいで富士も煙もよく見えなかつたと詠んでいるが、阿仏尼が煙が立たない富士を詠んで為氏に批判されていることを考えると、富士と煙の関係は周知のことであったことがうかがえ、頼朝が和歌の知識をおさえて作歌を行っていたことがわかる。もう

一首は慈円との贈答歌で詠まれたものである。

みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつくしてよ壺の石文
(同・雑下・一七八六)

物名歌のように東国の地名を詠みこむことにより、東国の覇者としての側面を顕著にした歌である。久保田淳氏は本歌に『古今和歌集』「えぞ知らぬしま心みよ命あらばわれや忘るる人や問はぬ」と、『海人手古良集』「別れ路をけふぞ限りとみちのくのいはでしのぶに濡るる袖かな」、さらに、西行の『山家集』「むつのくの奥ゆかしくぞ思ほゆる壺の石文外の浜風」の三首を念頭においていると指摘している。こうした本歌取は高度な技術が要求され、本歌取する和歌が多ければ多いほど、詠み手の作歌の資質、センスが問われる。すなわち、この歌が複数の歌を本歌取しているならば、頼朝はかなり多くの和歌を眼にする機会があったといえ、作歌の能力、センスが相当に高かったと考えられる。慈円の『拾玉集』に収められたこの歌の後には慈円が、

凡此人如此贈答之人尤希有歟、羊僧始対揚、尤為珍事

と述べ、自分と同等に和歌を詠む頼朝の才能に感嘆している。だが、頼朝に基礎的な和歌教養があったにせよ、著名な歌人である慈円と対応するだけの和歌知識の摂取を行う時間が頼朝にあったとはむしろ考えにくい。このことについて、多賀宗隼氏は十三歳

まで京都で育っただけの頼朝がこれだけの公家的教養をいつものにしたのか不思議であり、彼が関東武士に対して、京都風、貴族的教養を表示することを慎んでいて、和歌を口にしなかったのではないかと指摘している。¹³⁾では、これらの歌はどのようにして生れたのだろうか。石田吉貞氏はこれらの歌が手紙で詠み交わされていることから、頼朝の和歌に助力者があつたと指摘し、作をそのまま信じることはできないようだと言っている。¹⁴⁾いずれにせよ、これらの歌が頼朝作か否かの真相は不明であるが、実朝の歌才が頼朝から譲り受けたことを感じさせる。

四

源実朝は源頼朝と北条政子の次男として一一九二(建久三)年八月九日に鎌倉で生まれた。一一九九(建久十)年に頼朝が逝去すると二代将軍に頼家がついたのだが、頼家は粗暴な人物で、比企能員と結び北条氏を退こうと企て発覚したため、一二〇三(建仁三)年に将軍職は頼家から当時十二歳の実朝に引き渡される。順調に官位を進み、二十七歳の時に右大臣につき順調かに見えた実朝であったが、右大臣に就任した翌年の一二一九(建保七)年一月二十七日に鶴岡八幡宮にて頼家の遺児の公暁に殺害された。二十八歳であった。

実朝はその短い生涯において作歌活動に熱心であった。『吾妻鏡』によると、初めて和歌を詠んだのは十四歳とされ、二十二歳までには六六三首を取めた私家集『金槐和歌集』¹⁵⁾を作成した。実朝の和歌への情熱は相当なもので、『吾妻鏡』建暦三年九月二十六日条には、

当代は歌鞠をもつて業となし、武芸廢るるに似たり。女性をもつて宗となし、勇士これ無きがごとし

と側近の長沼宗政が怒ったとされ、実朝の政治的な関心の低さがかがいが知れる。何故、実朝がここまで和歌にのめり込んでいったのか。様々な要因が考えられるが、父の頼朝は勅撰歌人であり、また家臣の三浦義村、大江広元、北条氏も和歌を愛好するなど、実朝を取り巻く環境は和歌と密接であった。また、実朝の側近宇都宮頼綱(蓮生)と朝業兄弟は宇都宮歌壇を形成した宇都宮氏の出身で文芸に造詣が深く、頼綱、朝業は実朝と和歌贈答を行っており、実朝の歌風に何らかの影響を与えたと考えられる。

さて、実朝の歌風について、斎藤茂吉氏は「実朝が」万葉調の歌を詠むに至ったのは、先天的に優れた素質があつたために万葉の歌の心を理解し得たからである」と高く評価したうえ、

実朝は古語を踏襲することは平気でやっていた。くよくよしない。そこが、明治の正岡子規に似ている。子規は、一方古

語を其の儘用いるのを泥棒とまで言っているが、『万葉を模する』『万葉調の歌を詠む』と平気で大きな声で言っていた。当時、鉄幹子が小生の詩とか明治の歌だとか、万葉以来唯一の詩風だとか言っていたのは、よい対照であった。実朝の歌にはその平気さが表れている。大まかで、定家あたりと比較すれば、無器用であつて、余り骨も折つてない。言葉も当時の俗語やら万葉時代の言葉やら仏語漢語など思う通りに詠んでいる。

と、述べている。¹⁵確かに、『金槐和歌集』は大胆なほど頻繁に本歌取を行つており、むしろ、ここからは実朝の「無器用」さを感じられる。しかし、実朝の師、定家はこの本歌取についてどのような思つたであろうか。『吾妻鏡』承元三年八月十三日条によると、定家は本歌取の作法を記した『近代秀歌』を実朝に贈呈している。この『近代秀歌』には定家は現代歌人のあの人の歌だとわかるものは本歌取してはいけませんが、源経信、源俊頼、藤原顕輔・清輔父子、藤原基俊、藤原俊成の歌は近代歌人であつても古典的歌風を保つているので本歌取しても良いとしている。また、定家は『毎月抄』や『詠歌大概』において、歌の能力が未熟な間に『万葉集』を模倣するのは良いことではなく、しばらくは自分で心構えをして万葉風を詠むべきではない、取つた詞は本歌と同じ位置に配置

せず、上句下句とに分けておくなどと記している。とするならば何故、実朝は定家の指摘を聞き入れず、本歌取をし続けたのか。渡部泰明氏は本歌取が模倣を超えて固有の自己表出を託すに相応しい方法になりえるのは、古から隔てられるが故に古への指向をかきたてられるという表現構造が古へ憧れるほかない自己を重ね合わせることを可能にしていると指摘している。¹⁶そして、西下経一氏は実朝が万葉調の歌を好んだのは古代に対する憧憬が影響しているからだと述べている。¹⁷実朝の本歌取が古代憧憬の体现であつたかは不明だが、「まこと」を基調とした万葉調が実朝の心情と合致していたことは否定できない。

さて、『万葉集』や『古今和歌集』などから本歌取された『百人一首』に採られた歌をみてみたい。

世の中は常にもがもななきさこぐあまのをぶねの綱手かなしも
(金槐・雑・六〇四)

川田順氏は本歌として、『万葉集』沙弥満誓の「世の中を何にたとへむ朝びらき榜ぎ去にし舟の跡なき如し」、吹黄刀自の「河の上のゆついはむらに苔むさず常にもがもな常少女にて」、『古今和歌集』東歌「みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こく舟のつなでかなしも」の三首をあげている。実朝は漁夫の姿を眺めながら生きることへの欲望、湧き上がった不安感や無常観を一つも飾り

立えず、先にあげた古歌から「古語を踏襲」し、直接的に詠むことと独自の世界観を表現している。実朝の歌風について小林秀雄は「実朝の歌は悲しい。おもしろい歌でもおらかな歌でもないのだから。恐らく、実朝の憂悶は、遂に晴れることはなかったのであり、それが、彼の真率で切実な秀歌の独特な悲調をなしているのである」と述べているが、まさにこの歌も実朝の憂悶、不安が強く表れている。

実朝の歌には強さと弱さ、武士の無骨さと公家的な優雅さという対極した二つの世界が混在し、相反する二つの境界線に揺れている実朝の心情が独特の歌風、哀愁を帯びた歌を生み出したといえる。

さて、ここで疑問なのは定家や蓮生が何故この歌を『百人一首』に選んだかである。武家が台頭し始めた鎌倉時代の風潮には武士性の強い歌を選ぶと考えられるが、定家や蓮生はあえて、二十八歳で暗殺された実朝の悲劇に重なる、生きることの悲しみが表れた歌を意図的に選出したとも考えられる。なお、定家は『新勅撰和歌集』の編纂にあたり、二十五首の実朝の歌を採り、そこには『百人一首』の歌も選ばれている。定家にとり、この歌は実朝を表すにあたって否定することのできない、実朝らしい歌と認識していたといえる。

罪業を思ふ歌

炎のみ虚空に満てる阿鼻地獄ゆくへもなしといふもはかなし

(金槐・雑・六一五)

本歌に適当なものとして『古今和歌集』の詠み人しらず「わが恋は虚しき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」がある。地獄を詠んだ歌には西行の『聞書集』「地獄をを見て」に「つみ人のしぬるよもなくもゆるひのたきぎなるらんことぞ悲しき」があるが、西行はこの歌を地獄絵を見たあとに詠歌している。実朝が西行のように地獄絵を見ながら詠歌したのかは定かでないが、戦乱にて源氏の武将たちが殺害した人々への罪業を思い、かつ、源氏の棟梁である自分も決して救済されることはないという現実能耐え抜こうとする憂悶を秘めた心情が感じられる。こうした憂悶は辞世歌にも詠み込まれた。

出でて去なば主なき宿となりぬとも軒端の梅よ春を忘るな

(『吾妻鏡』)

本歌は菅原道真の「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな」、式子内親王の「ながめつる今日は昔になりぬとも軒端のうめはわれを忘るな」とされる。『吾妻鏡』承久元年正月廿七日条は、この歌を実朝が暗殺当日に詠んだ辞世歌としているが、詠歌と暗殺の時期があまりにもタイミングが良すぎるので

創作の可能性が高い歌である。斎藤茂吉氏は実朝の辞世歌について、「平凡で明快で、何も拘っていないところが実朝らしいのではないか」と評価している⁽⁹⁾。しかし、実朝が暗殺の気配を感じ取って、何かしらの意図をもち道真の歌を本歌取したならば、自らの生涯を不運な生涯を送った道真と重ねていたのだろう。外村久江氏は、実朝の辞世歌は悲劇性を増徴させるために悲劇的生涯を送った菅原道真を引き合いに出すことによって実朝を道真的な人物に描き出そうとする意図が見えると指摘している。歴史に「もしも」はないが、もし実朝が長く存命したら、関東で形成された武家歌人の擁護、武家歌壇はもつと違った発展をしていたかもしれない。正岡子規も「あの人を十年活かして置いたらどんな名歌を澤山残したかも知れ不申候」と、実朝の早すぎる死を惜しんでいる。

注 (1) 藤幹直『中世武士社会の構造』(昭和二〇年、目黒書店)

(2) 石井進『鎌倉武士の実像』(二〇〇二年、平凡社ライブラリー)

(3) 石井進『鎌倉幕府』(二〇〇四年、中公文庫)

(4) 注3参照。石井氏は守護地頭の制度は『吾妻鏡』によるところが多く、九条兼実の『玉葉』では守護地頭の語を発見することができないうとして、石母田正氏の説を引用し論じている。

(5) 龍肅『鎌倉時代』上(昭和三十二年、春秋社)

(6) 江戸時代成立の『武家百人一首』に頼家作として一首あるが、和歌にまつわる話は皆無に等しい。

(7) 池上英子『名譽と順応』(二〇〇〇年、N T T出版)

(8) 古橋信孝『万葉集』(一九九四年、ちくま新書)

(9) 折口信夫『折口信夫全集』「花の話」(昭和四〇年、中央公論社)

(10) 『沙石集』では頼朝と梶原景時が詠んだものと記されている。

(11) 『新古今和歌集』(昭和五十四年、新潮日本古典集成)

(12) 多賀宗準『源頼政』(平成九年、吉川弘文館)

(13) 石田吉貞『藤原定家の研究』(昭和三二年、文雅堂)

(14) 『金槐和歌集』の名前の由来は右大臣家歌集で、金は鎌倉の「鎌」の金偏から、槐は古来中国の三公の印として殿前に植樹した樹木のこと、大臣の中国風の呼び方である。

(15) 斎藤茂吉『斎藤茂吉選集』「源実朝雑記」(一九八一年、岩波書店)

(16) 渡部泰明『中世和歌の生成』(一九九九年、若草書房)

(17) 西下経一『和歌史論』(昭和一九年、至文堂)

(18) 小林秀雄『モーツァルト・無常ということ』(平成十八年、新潮文庫)

(19) 斎藤茂吉『斎藤茂吉選集』「源実朝」(一九八二年、岩波書店)

(20) 外村久江『鎌倉文化の研究』(平成八年、三弥井書店)

(二〇〇九年 卒業)